

# 牧師所感：曠野の詩 —死んだ子猫の世話—

過る4月23日、当教会の裏庭に住んでいた親猫が子猫を産んだ。雨の降る肌寒い夕方で、産れた子猫は寒さの為に冷たくなって生れるや否や死んだ。母親猫は死んだ子猫を口にくわえて来て、表の玄関の階段に放置した。そして母猫は立ち去り何処へ行くのか行ってしまった。赤子の子猫の死骸が階段に放置され、子猫は冷たい雨に濡らされていた。時に、たまたま裏の家に用事があって、教会の牧師の奥さんが玄関に上って行った。ところが、雨に濡れて死んでいる産れたばかりの子猫の死骸を発見、不憫に思い、拾い上げて土に埋めるつもりで持ち帰ったと言うのである。実は牧師の奥さんは筆者の家内（教会では師母と呼ぶ）で、産れたばかりの子猫の死を悲しく思い、布にくるんで牧師館に帰り、小さな布でくるんで子猫の頸の下を指でトントンと叩いたと言う。しばらく意識的ではなく、無意識のうちに数秒をトントンと頸の下をなでるように叩いていたところ、かすかに動く気配を感じたと言う。びっくり仰天した家内は生きている子猫であることを確信して、毛布の代りに毛布みたいなハンカチにくるんで、大急ぎで母乳の代りになる人工ミルクを作り、何滴飲ませたと言う。そして3日間1時間置きに人工ミルクを数滴ずつ与え、母猫の代りを務めている姿を見たのである。ああ、生命の不思議よ！キリストの御復活を喜んでお迎えした私共人類の希望よ！！

さて、2025年度のイエス・キリストの御復活を心から喜んで、希望を持って生かされていることを感謝する。ここに一冊の詩集がある。『曠野の詩』集である。肺結核を患い希望を持って病と闘ったキリスト者の詩集である。その中の一編を掲載してキリストの御復活の希望をお伝えしたい。

## 曠野の詩

### 復活

あなた「生きよ」と宣えば	私は生きる。
生きる望を失い果てても、	尚もなおも
あらゆる苦しみを後に蹴って、	決然と！
あなた「眠れ」と宣えば	私は眠る
「起きよ」とあなたの宣うとき	
ああその朝	むつくりと私は起き上るので、
ああその永遠の朝！	

（福岡県の人、福岡高校文科在学中発病、療病十年の後 昭和十年五月没、  
『刺の祝福』の著者）